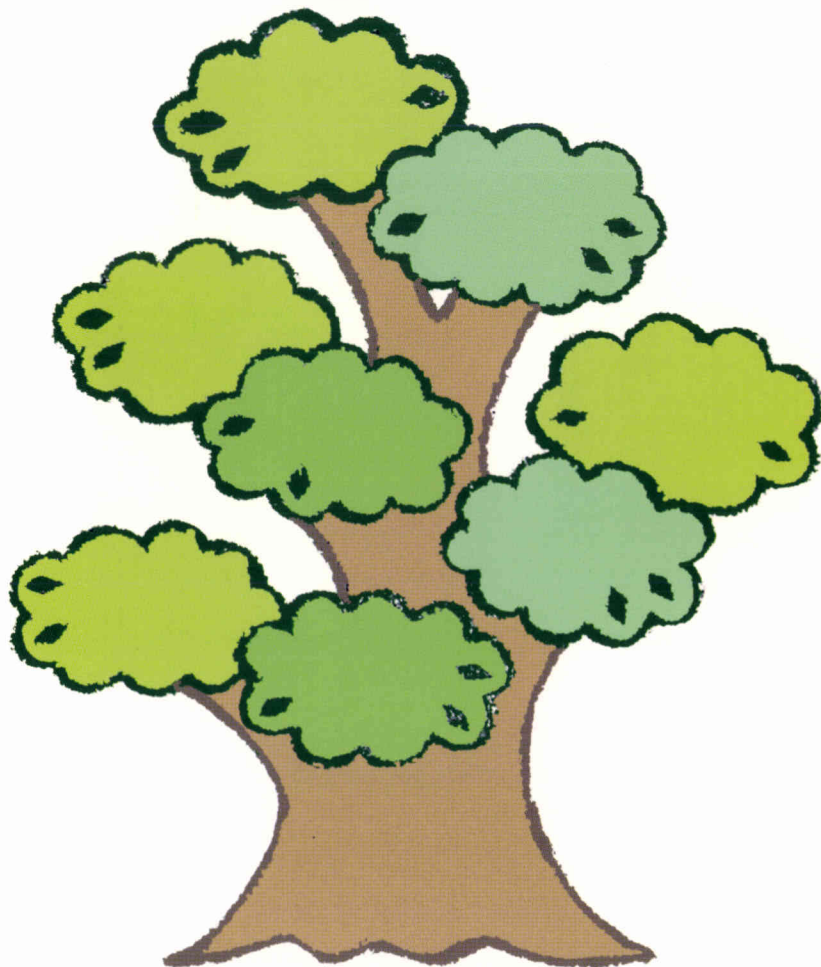


神の民
LAOS講座 第5号



神の民の歩み

— 2000年のキリスト教会史 —



日本福音ルーテル教会

神の民 LAOSの樹

⑧「世界」の中のキリスト者

家庭と職業への召命
キリスト者と生命倫理
キリスト者と社会問題
人権・正義・平和・環境保全
情報化/グローバル化

⑦宣教と奉仕の理論と実際

教会は「宣教共同体」
神の民・「信徒と教職」
宣教と奉仕の具体像
牧会的カウンセリング
教会のディアコニア

⑥信仰継承

旧約聖書に見る信仰継承
小児洗礼と親・教保・教会の役割
堅信教育モデル
教育カリキュラム
祖先と死者の記念

③教理問答・諸信条

小教理問答書の展開
アウグスブルク信仰告白
ニケア信条と教会再一致
義認の教理とルーテル教会
日本の社会・文化の中で
信仰を告白すること

⑤教会の歴史

初代教会の歴史
宗教改革の展開
現代教会の流れ
JELCの歴史
自分の教会の歩み

②説教の聴き方・語り方

聖書日課(バコパ-)の意味
説教の主題発見
説教の構成と表現
霊的な奉仕への召命
説教の展開としての牧会

④「聖書」とその読み方

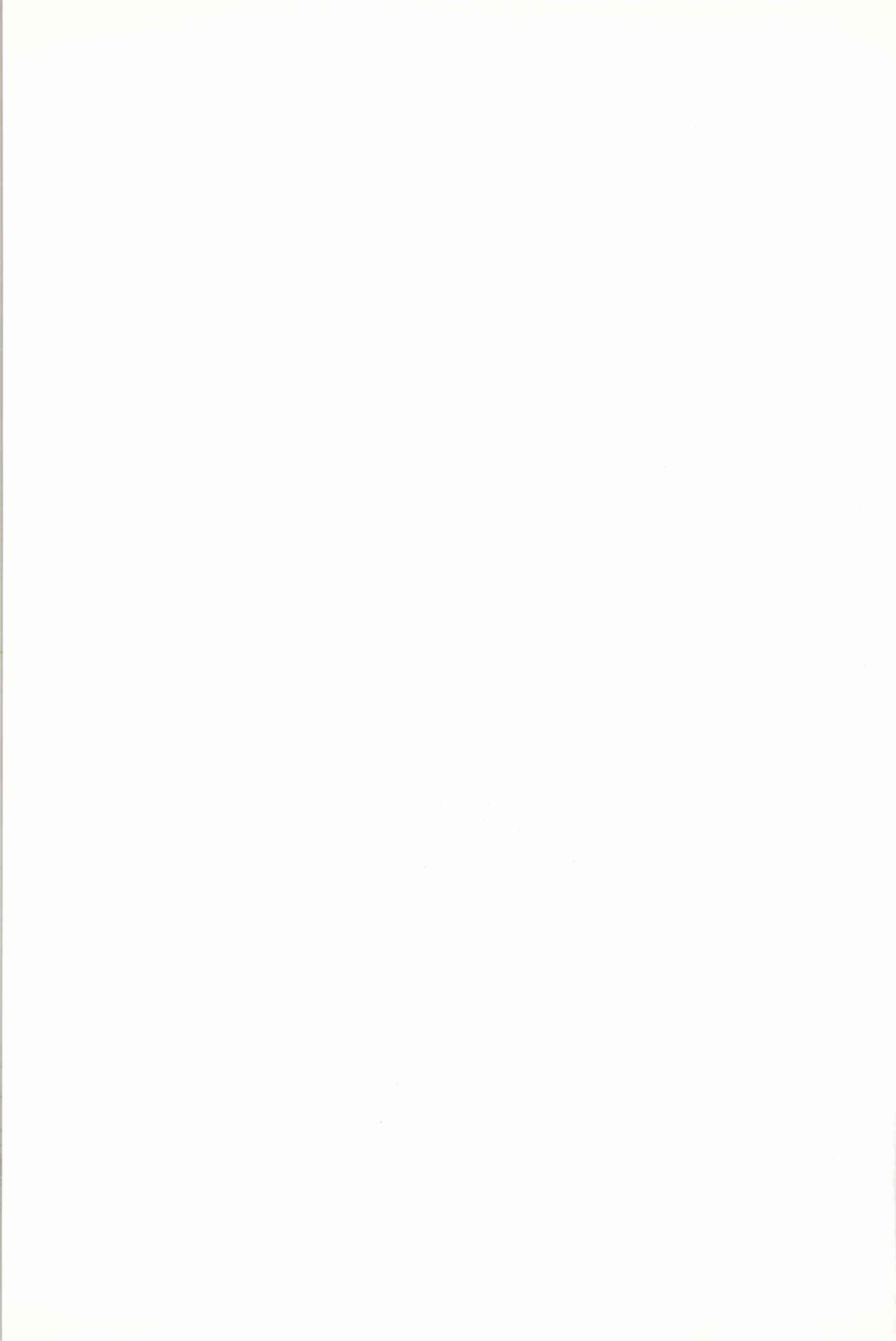
「聖書」の読み方
救いの歴史の道筋
聖書の各書を読む
聖書とその周辺
「私」の聖書ノート

①礼拝の意味と実践

教会は「礼拝共同体」
教会の暦と礼拝
礼拝と音楽・会堂建築
式文の構成と会衆の参加
公同礼拝の司式者の役割

祈り・聖書

家庭と社会
宣教共同体
礼拝共同体



も く じ

はじめに	5
第1章 初代教会	6
1) イースターからペンテコステ	6
2) 教会の誕生と使徒言行録	7
3) ユダヤ人への伝道と異邦人伝道	8
4) 新約聖書の成立	9
5) 教会組織、制度の発展	10
6) 教理の確立、信条の成立	11
7) 教父たちと東西の教会	12
8) キリスト教の公認と修道運動	13
第2章 中世の教会	14
1) 地中海文化圏からヨーロッパの形成へ	14
2) 修道院の発展と宣教の進展	15
3) 教皇制	16
4) 東西の教会の分裂	17
5) 学問の発展	18
6) 十字軍	18
7) 教会改革	19
第3章 宗教改革 (16世紀を中心に)	22
1) ルターとその宗教改革	22
2) ツヴィングリと再洗礼派	24
3) カルヴァンとその流れ	25
4) 英国の宗教改革	26
5) ローマ・カトリック内の改革運動 (対抗宗教改革)	26
第4章 近現代史と教会の展開 (17-20世紀)	28
1) 宗教改革の思想の固定化——プロテスタント正統主義	28
2) 信仰の炎——敬虔主義	28
3) 理性の時代——啓蒙主義	29
4) リバイバル——信仰復興あるいは大覚醒運動	29
5) 20世紀——新しい教会のあり方へ	31
第5章 日本のキリスト教史 (16世紀からの456年間)	35

1) キリスト教の日本との出会い	35
2) ザビエルたちの布教活動	35
3) 福音宣教の再開——プロテスタントも参入	37
4) 近代化とナショナリズムの中で	38
5) 戦後の展開と課題	39
第6章 JELC の113年の歴史	40
1) アメリカからの宣教師	40
2) フィンランドからの宣教師	41
3) 戦前の展開と教団合同	42
4) 戦後の再出発	44
5) 「アスマラ発言」と自立への歩み	45
6) 宣教百年、そして PM21	45

LAOS 講座へのお招き

信徒としてよりよく生きるために共に成長していこう

信徒としての成長を

キリスト者として生きようと決心しました。それは、イエス・キリストを通して神さまから与えられた十字架と復活の福音を信じ、洗礼を受けて、教会の交わりの中に入れていただいたからです。求道者会、洗礼準備会での熱心な学び、兄弟姉妹に見守られながらの洗礼式でのあの感激を懐かしく思い出します。あの時言われた言葉、「洗礼はゴールではなく、スタートですよ」もまた忘れられません。しかし、その後の今日に至るまでの信仰の歩みを振り返るとき、聖書についても、信仰者としての教会と社会の中での生き方についても、もっともっと学びを深め、実践していきたいと思わないではいられません。—これは、多くの教会員の方々に共通する思いではないでしょうか。信徒としての成長、このことは自分自身にとっても、また教会にとっても、非常に大切なことです。

ルーテル教会としての決心

私たちが属する日本福音ルーテル教会（JELC）は、「福音に生き、社会に仕え、証しする」をスローガンとする、「JELC 宣教方策21」（パワーミッション21、略称 PM21）を2002年5月の総会で採択しました。福音に生かされて生きる。社会に仕え、そこに住む一人ひとりに仕える。十字架と復活の主イエス・キリストとその恵みとを大胆に証しする。そういう教会、そういう信徒になろうと教会全体で決意したのです。

全体教会の方策は、個々の教会で具体化されることではじめて実を結びますし、個々の教会でということは、一人ひとりの信徒が兄弟姉妹みなと共に手を携え、祈りを一つにしながら、実践していくことで本当の形をとります。「キリストがあなたがたの内に形づくられるまで」（ガラテヤ4:19）、その日までともどもに信徒として成長していきましょう。パウロはこうも言っています、「わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者になっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです」（フィリピ3:12）。

LAOS (ラオス) として

PM21の第二プロジェクト (P2) の目標は「証しし、奉仕する信徒になろう」です。そこで検討の結果、そのような信徒になっていくために、信徒としての受洗後の教育、生涯かけての成長のための教育のプログラムを用意しようということになりました。そして、それを「LAOS 講座」と名づけました。LAOS (ラオス)、それは、新約聖書が書かれたギリシャ語で「神の民」(ラオス・セウー) という言葉の「民」という言葉です。わたしたちは神の民、信仰の共同体、礼拝共同体、宣教共同体です。そのなくてはならない一員です。この講座の特徴は、個々の信徒の内的、霊的成長というのに留まらず、むしろ共同体の中で、共同体と共に成長する教會的信仰また生き方を目指している点です。LAOS という言葉から英語の信徒 laity という言葉もできたのですが、この講座は信徒こそ教會の中心であり、教會そのものだという考えに貫かれています。

証しし、奉仕する信徒になる

「証しし、奉仕する信徒」になっていくためには、知的な学習をすればそれで十分なわけではありません。この「LAOS 講座・第一期」でキリスト者としての基礎的な知識を習得したあと、さらに「第二期」で、より実践的な学びをして「証し」と「奉仕」を生きていく信徒へと成長していきましょう。そのためには、既存の書物から学ぶというだけでなく、実際にそのような生き方をしている兄弟姉妹からも積極的に学んでいきたいと願っています。

教會の輪の中で

「LAOS 講座」の第一期の学びは別掲の「LAOS の樹」にそのカリキュラムが載っています。その冊子を継続してご購入いただき、教會の諸集会で、学びを進めていってください。成果を分かち合い、そこで得たものを生活の中で生かし、足腰の強い信徒になっていきましょう。

2006年5月

日本福音ルーテル教會宣教方策21 (PM21)
プロジェクト2 (P2) 委員会

はじめに

キリスト教会の歴史探訪の旅を始めましょう。今日の私たちにまで続く長い長い信仰のリレーです。

有名無名の人物がこのキリスト教の歴史を作り上げてきました。わたしたちが知っている教会の歴史は、ペトロやパウロの原始教会、そしてポンと1500年跳んで16世紀のルターとその宗教改革、その次にはもう自分の属する教会のことぐらいですが、その間には数え切れない信仰者がいて、教会の歴史というすばらしい織物を織り成してきたのです。

そして次第に気がつきます、キリスト教の歴史は人間の営みであると同時に——個人としてまた教会という組織として——、実は決して人間自身が作りあげたものではないということに。そうです。熱心な、有力な、歴史の主演に見える個々人を超えて、神ご自身がこの歴史を導いてこられたことに目が開かれます。新約聖書の「使徒行伝（言行録）」が長く「聖霊行伝」と呼ばれてきたのはまことにもっともなのです。

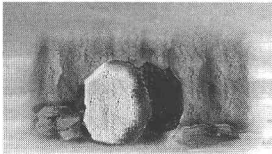
そして、この聖霊によって導かれたキリスト教の歴史は、表面的には紆余曲折あるいは波瀾万丈、しばしば混乱と迷いに満ち、いつゴールにたどり着くのかまるで見当もつかないドラマに見えます。教会は世界中に広がりました。栄光もありましたが、汚点もありました。しかし、わたしたちは信じます、この世界は究極の目標に向かって進んでいるのだということを。神さまのご計画にしたがって、創造と救済の完成へ導かれているのだということを。しかも、その方法はといえば、「神は、宣教という愚かな手段によって信じる者を救おうと、お考えになった」（Iコリ1:21）。その目標は、聖書的な表現を用いれば、神の支配、「神の国」の到来です。

このような神の救済の歴史の中にある教会の役割を大づかみにとらえましょう。その流れの中にわたしたちがいて、わたしたちの教会があるのだということを知りましょう。これまでの歴史を導き、さまざまな人々を用いられてきた主の働きに、わたしたちも同じように用いられるのだということを確認させていただきましょう。福音宣教と世界の完成に向けての神の働きのために。その一助にこの小さな書物が役立ちますように。体裁は小さくてもその器に盛り込もうとしている神の歴史はあまりに大きいということも認識できるでしょう。

第1章 初代教会

使徒たちの時代から5世紀までの教会のことを「初代教会」と呼ぶ習慣があります。「初代」と言えば「第一代」のことですから、使徒たちの教会こそ「初代」と呼ぶほうがよさそうなのですが、どういふわけか、5世紀までの教会を「初代教会」と呼んでいます。使徒たちが中心だった最初の教会は「原始教会」と呼ばれています。

1) イースターからペンテコステへ



主イエスが十字架につけられたとき、数人の女性たちを別にして、弟子たちはみんな逃げ出していました。しかし、復活した主イエスは逃げ出した弟子たちを改めて召し、主の復活の証人とされました。「復活」(アナスタシス)とは、もともと「再び立ち上がる」という意味ですが、十字架で挫折した弟子たちは、復活した主イエスに出会い、主の復活の証人として「再び立ち上がって」いくのです。弟子たちが最初に宣べ伝えたのは主の復活でした。ですから、教会の礼拝も、主の復活の日、つまり、日曜日に守られるようになったのです。

しかし、その弟子たちが公然と宣教に立ち上がっていくきっかけとなる出来事がありました。聖霊降臨の出来事です。その時の出来事については、使徒言行録2章に詳しく記されていますが、とりわけ印象的なのはペトロの説教です。ほんの一ヶ月少し前にはイエスを知らないと言って逃げ出したペトロが、確信に満ちてイエスの証しをしています。この確信は、復活したイエスに出会ったことによって与えられたものでした。「ペンテコステ」とは、単純に「50」



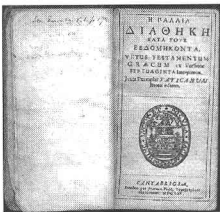
という意味ですが、過越から数えて50日目に当たる「五旬祭」の祝日にこの出来事が起こったので、聖霊降臨日がペンテコステと呼ばれるようになりました。

2) 教会の誕生と使徒言行録

聖霊降臨日のことを「教会の誕生日」と呼ぶことがあります。この日をきっかけに教会が成立していった、という意味です。この頃は、まだユダヤ人だけの小さなグループで、イエスをキリストと信じ、イエスの復活の証人となった人々がいただけでしたが、聖霊降臨日には、いつもは海外に住んでいて、祭に参加するためにエルサレムに戻って来ていたユダヤ人が、この出来事を目撃していましたから、この事件の目撃者がそれぞれの国に帰ったときに、彼らの口からもこの話は伝えられたことでしょう。いずれにしても、聖霊降臨日にはなんと3,000人の人が洗礼を受けました。

この出来事をきっかけとして弟子たちの宣教が本格的に開始されました。使徒言行録はそうした弟子たちの宣教の物語です。この使徒言行録はルカが書きました（聖書の著者でユダヤ人でないことがはっきりしているのは、このルカだけです）。

その頃のユダヤ人は、使徒言行録6章にあるように、「ヘブライ語を話すユダヤ人とギリシャ語を話すユダヤ人」がいました。ここでいう「ヘブライ語」とは実は「アラム語」というよく似た別な言葉なのですが、パレスチナ本土に住む人々が話していました。しかし、本土に住む何倍ものユダヤ人が地中海世界の各地に住んでいました。その人たちは地中海世界の共通語だったギリシャ語を話していました。この時よ



創世記：原語はヘブル語ですが、「七十人訳聖書」はギリシア語で書かれています。

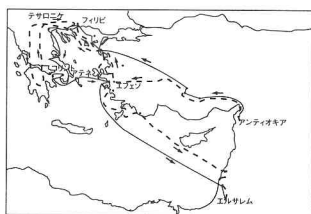
りも数百年前に（旧約）聖書もギリシャ語に翻訳されていました（「七十人訳聖書」と呼びます。新約聖書に引用されている旧約聖書の言葉遣いが旧約の本文と微妙に違うのは、ヘブライ語本文ではなく、このギリシャ語に訳された「七十人訳聖書」の本文からの引用が多いためです）。

3) ユダヤ人への伝道 と異邦人伝道

弟子たちは各地で宣教に従事しましたが、その宣教の対象はまだユダヤ人だけでした。しかし、使徒言行録10章にあるように、やがて異邦人にも福音が伝えられ、聖霊の促しによってペトロは異邦人コルネリウスたちに洗礼を授けました。しかし、ユダヤ人以外の人を無差別に「異邦人」と呼んでいたユダヤ人には、イエスを信じていても、ペトロが「異邦人」つまり「割礼を受けていない人」に洗礼を授けたことに大きな抵抗がありました（11章を参照）。

異邦人への本格的な伝道は、使徒パウロによって行われました。使徒言行録は12章まではペトロが中心となっていますが、13章から「バルナバとサウロ」が主人公となり、いつの間にか「パウロとバルナバ」と記され、ついには「パウロ」となります。「異邦人の使徒」という自覚を持っていたパウロは、無論、ユダヤ人にも宣べ伝えましたが、異邦人にも積極的に伝道していきました。

異邦人伝道については、当初は非常に大きな抵抗や戸惑いがありました。そこで使徒たちはこの問題をめぐって会議を開きます。それが「エルサレム使徒会議」と呼ばれている会議で、その後、今日に至るまで教会は大切な事柄は教会会議を開いて相談するという習慣を守ってき



* 詳しくは、聖書巻末の
地図参照。

*
紀元49年頃



パウロ

ガラテヤ2:1-10

ガラテヤ2:11-14

ました。そうした会議の最初のものである「エルサレム使徒会議」については使徒言行録15章に記されています。使徒たちはここで、いわゆる「ユダヤ人選民思想」を克服して異邦人伝道を公式に認めたのです。ガラテヤ書にもパウロの立場から見た異邦人伝道認可についての報告があります。異邦人伝道は教会にとっては非常に大きな決断だったのですが、その決断と実行がいかに困難だったかは、ガラテヤ書のパウロの激しい言葉遣いからも分かります。しかし、それでも教会は聖霊の導きに従って、困難な決断を実行に移していきました。

4) 新約聖書の成立

新約聖書の中で「聖書」という言葉が出て来るときには、それは「旧約」聖書を指しています。まだ「新約」聖書はなかったからです。あったのは、まだ「聖書」とは呼ばれていなかった使徒たちの手紙、福音書、使徒言行録などです。しかし、礼拝の中で使徒たちの手紙が朗読され、福音書や使徒言行録の物語が語り継がれて行くにつれ、使徒たちの手紙や福音書などが、「イエス・キリストに関する権威ある文書」と広く認められるようになり、そうした文書がまとめられていき、やがて「聖書」と呼ばれるようになりました。その時、それまでの聖書が「旧約聖書」、新たにまとめられた文書群が「新約聖書」と呼ばれるようになりました。

問題は、当時数多くあった類似した文書の中で、どの文書が「新約聖書」に含まれるべきか、という点でした。最終的に新約聖書の「正典」が決定されるまでには少し時間がかかりました。主要部分についてはかなり早くから決着していたのですが、例えば「黙示録」などにつ

* 397年カルタゴ教会会議

いては意見の相違があったからです。

線引きの基準は「使徒性」という判定基準でした。つまり、使徒自身によって書かれたか、使徒の証言を忠実に伝えている、と認められた文書が「正典」に組み込まれ、今の27文書からなる新約聖書が成立しました。この時、教会が決して焦ることなく慎重に選んだ文書が正典とされたのですが、(新約外典、偽典と呼ばれている) 排除された文書を読むと、教会の判断の正当性と公平性とがよく分かります。

5) 教会組織、制度の 発展

* 執事(口語訳) = 奉仕者
(新共同訳)。

奉仕者 I テモテ3:8
監督と奉仕者 フィリピ1:1

*² ローマ・カトリック教会
では司教、聖公会では主
教、プロテスタントでは
監督と訳される。

使徒言行録6章には、十二使徒に加えて七人の執事^{*}が選出された様子が記されています。使徒たちの手紙には「監督」とか「長老」といった用語も出て来ます。新約の諸文書が書かれた時代にはまだまだ流動的だったのですが、徐々に教会の中に組織や制度が生じてくるようになりました。

聖書で「監督」と呼ばれている職務^{*²}は、やがて今日「司教」とか「主教」と呼ばれる働きを担うようになり、「長老」が「司祭」と呼ばれるようになりました。「執事」は教会の内外の奉仕の職務を担当するようになりました。「司祭」は各個教会の礼拝と牧会の責任を持ち、「司教」は(多くは行政区画と同じ広がりをもつ) 地域の教会全体の責任を負うようになりました。

そうした制度の中には組み込まれませんでした。忘れてならないのは、女性の働きです。「やもめ」と呼ばれた夫と死別した女性たち、「おとめ」と呼ばれた未婚の女性たちが、今日という社会福祉の働きで大きな成果をあげました。「児童養護施設」や「老人ホーム」は、初

代教会の働きで始まりました。それまでは、そうした人々は社会から見捨てられていたのです。無論、そうした働きに必要な経費は教会が負担しました。初代教会に奴隷や下層階級の教会員が多かったのは、そうしたことも一因でした。

6) 教理の確立、信条の成立

*「キリスト」は、ヘブライ語「メシア」のギリシア語訳。メシアとは「油を注がれた者」の意味。旧約の時代に、王になるとき預言者が油を注いだことに由来している。サムエルはサウル王やダビデ王に油注ぎをした。

マルコ8:29、マタイ16:16

教会は教会の内外の人々に対して、教会の信仰を分かりやすく説明する責任を負っていました。宣教するということは、教会の信仰を受け入れてくれるよう説得することですから、イエスの誕生、生涯、死、復活が、教会の宣教を聞いている人々にどういう意味を持っているのかを具体的に説明しなければなりません。その過程で「キリスト教信仰の学問的な説明」つまり「神学」が生まれてきました。

教会がユダヤ人だけの時には、教会の信仰は「イエスはキリスト（メシア）である」という言葉に要約されていきました。しかし、「キリスト」（油注がれた方）^{*}という言葉は、ユダヤ人には大きな意味を持っていても、異邦人には理解できない言葉でした。ですから、異邦人世界では「イエス・キリストは主である」^{*2}という言葉で同じ内容を言い表しました。

*2 例えば、使徒10:36、ロマ10:9、I コリ12:3。手紙の中には至るところに「主イエス・キリスト」という表現が見られる。

「神学」が公的な性格を帯びると、つまり、「教会の公の教え」「共通の信仰」という意味を持つようになると、「教理」と呼ばれました。教理はキリスト教信仰のあらゆる側面に及びますから、膨大なものになります。それを圧縮して密度高く表現したものが、「信条」です。

今日、多くの教会が「使徒信条」「ニケア信条」「アタナシオス信条」を教会の信仰の基本としています。「使徒信条」は洗礼の際に洗礼

★ ニケア（ニカイア）公会議は325年。それを確定したコンスタンチノポリス公会議は381年。

（LAOS講座第3号「真理を求めて」参照）

★² 345－430年

志願者が行った信仰告白に基礎がありました。「ニケア信条」は最初の公会議だったニケア公会議の決議に基礎がありました。「アタナシオス信条」は礼拝では用いませんが、教会の中心的な教理である「三位一体論」と「キリスト論」を要約した信条で、アウグスティヌス^{★²}という神学者の影響が感じられます。

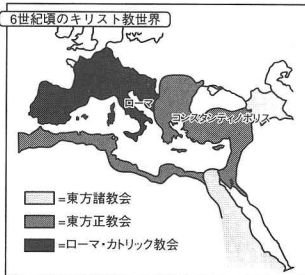
7) 教父たちと東西の教会

使徒たちは多分、アラム語で礼拝をしていましたが、すぐに教会は地中海世界の共通語であるギリシャ語を使うようになりました。新約聖書もすべてギリシャ語で書かれています。

しかし、3世紀頃から地中海世界の西半分ではラテン語が使われるようになり、礼拝もラテン語に切り替わります。他方、東半分では引き続きギリシャ語が使われました。ラテン語を使う教会を「西方教会」、ギリシャ語を使う教会を「東方教会」と呼んでいます。

ちょうどこの頃から、教会の中に優れた神学者たちが登場してくるようになりました。初代教会の神学者たちを総称して「教父」と呼びます。教会の教理を確立した「父祖たち」という意味です。ギリシャ語を使って著作した教父を「ギリシャ教父」、ラテン語を使って著作した教父を「ラテン教父」と呼んでいます。

ラテン教父には、テルトゥリアヌス、キュプリアヌス、アンブロシウス、アウグスティヌスなどがいます。ギリシャ教父にはオリゲネス、アタナシオス、エウセビオス、グレゴリオス、バシレイオスなどがいます。4－5世紀は、非常に優れた神学者が次々に登場し、キリスト教教理をゆるぎない基礎の上にうち建てました。



8) キリスト教の公認 と修道運動

キリスト教国教化までの流れ

310年 寛容令

313年 公認

392年 国教化

しかし、ローマ帝国の法律では4世紀初めまでキリスト教は未公認でした。ですから、しばしば迫害という最悪の事態が起きました。無論、教会の宣教は徐々に進展し、教会に対する人々の理解も広まりましたから、多くの場合、迫害は散発的で短期間のものでしたが、3世紀の半ばと4世紀の初めに組織的な迫害が各地の教会に壊滅的な打撃を与えていました。

ところが、ローマで政敵を破り西方の覇権を握ったコンスタンティヌスは、313年ミラノで東方皇帝リキニウスと会談し、キリスト教を公認することで合意しました。勅令は二人の皇帝の連名で、東方の首都ニコメディアで公布されました。「ミラノ勅令」と呼ばれます。

しかし、コンスタンティヌスの母親が熱心な教会員ということもあって、「信教の自由」をうたったミラノ勅令にもかかわらず、コンスタンティヌスは教会を公然と支援するようになりました。中には政府機関で出世するための方便として教会員になる、というような人もいました。教会が変質し始めていました。

ですから、ちょうどこの時期から、純粋な信仰を求めた一部の人が砂漠で禁欲的な修道生活を始めるようになりました。ここから、やがて中世になって東西の教会で修道院文化が花開くことになりました。

〈話し合いのために〉

- ①聖書に記されている初代教会と現代の私達の教会とに共通していることは何でしょうか。
- ②教理や信条が作られた目的を考えてみましょう。

第2章 中世の教会

6世紀頃から始まるほぼ千年を「中世」と呼んでいます。中世は東方でも西方でも「信仰の時代」でした。周辺の未開地域にはまだ異教の名残が多少は残っていましたが、文明世界はキリスト教一色の文化になっていました。

1) 地中海文化圏から ヨーロッパの形成へ

* 4世紀後半(375年)に、ゲルマン民族の大移動開始。ローマ帝国の分裂(364年)。西ローマ帝国の滅亡(476年)。

*² 571年頃ムハンマド(マホメット)生。
610年頃イスラムの成立。
711年イスラム軍西ゴート王国を征服。

初代教会の時代は、古代末期に重なります。古代は地中海文化の時代でした。中世は地中海文化の崩壊と共に始まります。その崩壊を促したのが、アラビアの一角に勃興したイスラム教の爆発的進展でした。地中海制海権もイスラム勢力の支配下に入りましたから、古代ローマの伝統を受け継ぐ諸民族は、内陸へと開発の方向を転じます。

このことは、地中海世界を中心としていた教会の宣教が内陸へと向かったことを意味していました。やがて、内陸にそれまでとは違った文化圏が成立します。それが、ヨーロッパです。

しかし、その前に重大な変化が今の西ヨーロッパに起こっていました。ローマ帝国の瓦解です。476年、名目的に皇帝位にあったアウグストゥルスという皇帝が退位させられ、ここにいわゆる「西ローマ帝国」が消滅します。代わって、ローマ人から「蛮族」と呼ばれた諸民族が各地に王国を建てます。多くはゲルマン系諸民族でした。昔の歴史書では「ゲルマン民族大移動」と呼ばれた出来事です。ゴート族、フランク族、ヴァンダル族、ランゴバルド族など、様々な部族がありました。征服者たちは、しかし、文化的にはローマよりも遅れていたため、ローマ文化に逆に圧倒され、キリスト教信仰も

受け入れていくようになりました。

他方、東方はコンスタンティノポリスに首都を置く東ローマ帝国が最強国家として存続していました。西方の王たちも名目上はその臣下という資格で自分たちの王国を支配していました。そうしたこともあって、西方と東方の教会も徐々に疎遠になっていきました。

2) 修道院の発展と宣教の進展



▲ 修道院と修道士

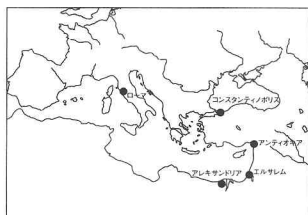
東方でも西方でも、中世は一言で言えば「修道院の時代」でした。未開の地が多かった当時のヨーロッパの開拓で先端的働きをしたのが修道院でした。自給自足が原則の修道院では、農地の開墾も重大な務めでした。もともと砂漠の修道運動に起源があった修道院は、当初「辺境へ辺境へ」という動きをしました（もっぱら都市で托鉢をしながら街頭説教をしたフランシスコ会やドミニコ会などの「托鉢修道会」が成立するのは13世紀のことです）。修道院は聖書や教父たちの著作の写本作りもしましたから、学問を受け継ぐ働きもしました。大学ができるのはまだ先のことでしたから、学校の役割も果たす場合があります。中世の神学者たちは、ほとんどが修道士でした（中世が終わり近世が始まろうとしていた時代のルターでさえ修道士でした）。

西方の修道院の基礎を作ったのはヌルシアのベネディクトゥス（543年没）という人です。この人が書いたとされる『修道会則』がヨーロッパの修道院運動のガイドブックとなったからです。砂漠の修道者たちは極端な禁欲を競うという傾向がありました。時には度を外れた禁欲に走りました。しかし、ベネディクトゥスの『修道会則』は極端な禁欲を禁じ、労働、祈り、

食事、睡眠など、人間の健康にも配慮した優れたガイドブックでした。

3) 教皇制

★ キリスト教会では「教皇」と呼ぶのが正式だが、一般には「法王」と長く呼ばれてきた。



中世の西方教会と東方教会の最大の違いの一つが、西方の「教皇制」でした。初代教会の時代には、ローマ、コンスタンティノポリス、アレクサンドリア、アンティオキア、エルサレムと5つの中心地がありました。しかし、7世紀になるとローマとコンスタンティノポリスを除き、中心地の3つまでがイスラムの支配下に置かれることになりました。コンスタンティノポリスの教会はしばしば皇帝の干渉を受けました。論争も多く、異端者も続出しました。ローマは、しかし、信仰問題で揺れ動くことはあまりありませんでした。ローマ教会の威信は、徐々に徐々に高まっていきました。

またローマ司教は、西ローマ帝国の崩壊後、ローマの伝統を受け継ぐ唯一の人物になりました。本来はローマ政府がローマ市民に支給した穀物やぶどう酒の配給をしたのもローマ司教でしたし、教皇グレゴリウス一世（604年没）は、なんと兵士の給料まで支払っていました。内陸で開拓と宣教の先端に立っていた修道院は、ローマ司教の認可で宣教を始めることが多かったので、結果的に内陸でローマ司教の権威が高まることになりました。

ローマ司教は早い時代から「ローマ首位権」を主張していました。マタイ福音書16章の「あなたはペトロ、わたしはこの岩（ペトラ）の上にわたしの教会を建てる」というイエス・キリストの言葉が、ペトロの後継者であるローマ司教の「首位権」の根拠だと主張していたのです。この主張は東方では認められませんでした

し、西方でも大きな抵抗を受けました。

この「ローマ首位権」の主張が徐々に浸透し、実現していったのは、中世盛期の13世紀のことでした。かつてはどの司教も普通に使っていた「パパ」(父)という名前は、ローマ司教だけが使うようになりました。ローマ司教が独占的に使う「パパ」は、「教皇」と訳されています。

4) 東西の教会の分裂

ローマ教皇はコンスタンティノポリスの皇帝と頻繁ではないにしても、連絡を取っていました。教皇の地位に就くときには皇帝の認可を受ける習慣があったからです。しかし、ローマは「蛮族」の王の支配下にありましたから、ローマ教皇は時に政治的な板挟みで苦しむことがありました。また、コンスタンティノポリスの教会が異端者の支配下に置かれたとき、ローマ教皇は公然とそれに反対し、一時的に教会が分裂することもありました。初代教会の時代は、知識人は誰でも母国語に加えてギリシャ語を理解できましたが(例外はアウグスティヌスでした)、中世になるとそういうこともなくなりました。

西方は、『神の国』『三位一体論』『告白』といった非常に優れた著作を著したアウグスティヌスの圧倒的な影響が今日に至るまで続いています。東方は、アウグスティヌスの影響をほとんど全く受けませんでした。このことも、東西の教会の相互疎外に少なからぬ影響を及ぼしました。

しかし、実質的には疎外状態にあっても、名目上は、教会は「一つ」でした。その教会が1054年、ついに分裂しました*。ローマ教皇とコ

* 西方教会はローマ・カトリック教会。16世紀以降、そこからプロテスタント諸教会や聖公会が分かれて出現。

東方は、ギリシア正教会、ロシア正教会、オリエンタル正教会、コプト教会など。

日本では日本ハリストス教会、ロシア正教会。

ンスタンティノポリス総主教が相互破門を行ったのです。それまでには様々な経緯がありましたが、コミュニケーション不足、誤解、政治的な影響なども大きな原因でした。

5) 学問の発展

西ヨーロッパの大学の教科内容

学士：三学(文法学、論理学、修辭学)

修士：四科(算術、幾何、天文学、音楽)

以上、自由七科

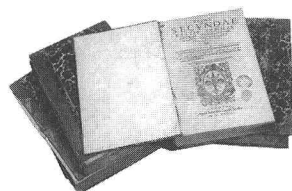
博士：上級専門課程

(神学、法学、医学)

中世の学問は修道院を中心に発展しました。ですから、先端的な分野は神学とそれに関連した哲学でした。中世の学問は厳密な定義と論理に特徴がありました。大きな問題は「普遍」と「個別」の問題でした。「美しい音楽」「美しい絵画」「美しい風景」があります。それでは、そうした個別のものどれにも共通する「美そのもの」(普遍)は実際に存在するのか、という問いです。「太郎さん」「花子さん」(個別)は確かに存在するのですが、「人間性そのもの」(普遍)があるのかなのか、という問題です。

あるという人(実在論者)もいましたが、普遍などは頭で考え出したものに過ぎないと主張する人(唯名論者)もいました。生活に追われている一般の人は、普通はそんなことは考えません。こうした学問は、スコラ学と呼ばれました。どうも「余暇」という言葉が語源のようです。

スコラ学は13世紀に目覚ましい成果を上げます。ドミニコ会の修道士トマス・アクィナスが『神学大全』という大著を著し、教会の信仰を体系的に説明しました。本書は今でも日本語訳が継続中です。



神学大全

6) 十字軍

中世の教会が犯した大きな失策に十字軍がありました。イスラムに奪われた聖地を武力で奪還する軍隊の派遣です。教皇が招集者となった十字軍は11世紀の終わりから13世紀の終わりま



で繰り返し派遣されました。人々は熱狂し、正規の軍隊だけでなく、統制の採れない群衆が付き従っていくこともありました。十字軍が通過した地域の民衆は、物価騰貴、食料の略奪など、散々な目に遭いました。

指揮官が従軍していた少年たちをイスラムに奴隷として売り飛ばすなどという考えられないことも起こりました。4回目の十字軍(1204年)は、聖地に行かずにコンスタンティノポリスを攻め、狼藉ろうぜきの限りを尽くして、皇帝を追放し、指揮官が「ラテン帝国皇帝」を名乗るといふようなことさえありました。ラテン人(西方の人)とギリシャ人(東方の人)の相互不信は決定的になりました。東西の教会の分離状態も永続的なものとなりました。

無論、攻撃を受けたイスラムの人々の敵愾心てきがいしんにも計り知れないものがありました。イスラム教は中世のキリスト教ほど非寛容的ではありませんでした。様々な制限はありましたが、宣教活動もできませんでしたが、教会は教会として存続できたのです。教会に対するイスラムの人々の不信が依然として根強いのは、十字軍の記憶にも遠い原因があるのかもしれませんが。

十字軍はどこから見ても失敗でした。

7) 教会改革

十字軍を見ても、かつては理想に燃えていた修道院の墮落も・・・その原因は農地を開墾するなどして富を蓄積したからですが・・・王侯貴族のような生活をしてきた有力な司教も、教会の信頼を損ねていました。二つの結果が生じました。教会への信頼を失った一般の人々が自分たちで神に従う道を模索し始めたことと、教会を改革しようとする運動が、修道院の改革を

きっかけとして生じてきたことです。

中世にはたくさんの信徒運動が各地で起こりました。そこでは多くの場合、「清貧」が強調されました。しかし、教会の指導を受けることがなかったので、多くの運動がしばしば極端な方向に流れました。清貧を強調することは、富を蓄積した教会に対する無言の圧力にもなりました。その結果、ほとんどの信徒運動が異端として弾圧されました。

その一方で教会の改革を真剣に模索する動きも途絶えることなく続いていました。10世紀にはクリュニーという修道院から始まった一大改革運動が修道院の改革に大きな成果を上げました。13世紀には、それまでの信徒運動と同じように清貧を強調し、民衆の中に入って説教をしたフランシスコ会やドミニコ会などが生まれました。



ジョン・ウィクリフ
(1320頃-1384)



ヤン・フス(1369-1415)

しかし、改革者としてとりわけ名高いのは、イングランドのジョン・ウィクリフ(1384年没)とボヘミア(チェコ)のヤン・フス(1415年没)です。二人は、それぞれの地で教会の改革に正面から取り組みました。説教によってまた論文を出版して改革を訴えました。賛同者も増えました。しかし、改革を唱えることは、教会の現状に対する批判となりますから、最終的には二人共に異端者の烙印を貼られました。フスはコンスタンツ公会議で火炙りの刑に処せられました。1415年7月6日のことでした。ルターが『九十五箇条の提題』を掲げるほぼ100年前のことです。

ルターはこの異端者フスを「聖人」と賞賛して当時のカトリック教会と決定的に対決することになります。(なお、教会讃美歌259番はこの

* イエス・キリストわが救い
神の怒り とりのぞき
み苦しみによりて
滅ぶる者救いたもう。

フスがラテン語で作った歌をルターがドイツ語に訳し、それを日本語にしたものです)。

〈話し合いのために〉

- ①ローマ教会が自分たちを「唯一の教会」と主張したのはなぜでしょうか。
- ②十字軍の出来事から、わたしたちは「聖地」をどのように考えるべきでしょうか。

第3章 宗教改革 (16世紀を中心に)

1) ルターとその宗教改革

* 明治期に日本に紹介された時「ルーテル」と表記されたので、教会もそれ以来「ルーテル教会」と名乗ってきた。ルターの生涯と宗教改革的転回、その神学の核心はLAOS講座第3号「真理を求め」35-43頁を参照。



マルティン・ルター
(1483-1546)

キリスト教の歴史にとってだけでなく世界史に大きな影響を及ぼした人物、マルティン・ルター^{*}はどこまでも救いの道の探求者、聖書の真理の求道者でした。それに忠実であったがゆえに、1500年続いてきた教会とその信仰のあり方に対して改革者にならざるを得なかったのです。

ルターがドイツのアイスレーベンという町に生まれたのは1483年、日本で言えば戦国時代(信長の天下統一の90年ほど前)です。ヨーロッパも中世の末期でした。イタリアにルネサンスの花が咲いていた頃です。鉱山経営で財をなした父の期待を一身に背負ってエルフルト大学法学部で学んでいた時、落雷に遭ったのをきっかけに同じ町にあった修道院に入ったといわれています。死を巡る深い不安と恐れがあったからですが、肉体の死にとどまらず魂の問題だったでしょう。「いかにしてわたしは神の怒りを免れ、かえってその恵みを獲得できるか。いかにして救いの確かさを得ることができるか」、この問いへの解決を求めて、彼は日夜徹底的に修業に励みましたが、そこに答えはなく、10年余り聖書と格闘し、詩編やローマの信徒への手紙を講義する中で、神の義とは人間を審き滅ぼすものではなく、罪人をキリストのゆえに義とし(義と認めて)、赦し、受け入れ、さらに新しいいのちを生きるようにしてくださるものと知らされるのです。自力でなんとかして恵みを受けるのにふさわしい人間になろうとする能動的な努力によってではなく、あるがままに罪をもったまま、神を信頼し神の恵みに自らを委

ね切る信仰をとおして救いにいれていただくのです。「恵みのみ」「信仰のみ」といいますが、正確には、「恵みによってのみ」、またそれ自身も恵みの賜物である「信仰を通してのみ」です。そのことを保証しているのが聖書ですから「聖書のみ」となります。すべては「キリストのみ」です。

ですからルターの改革は礼拝改革になります。伝統的な形式は受け継ぎましたが、肝心のところが変わりました。それまでは人間が罪の償いとして神に捧げていたミサ（キリストの体と血）は、神が罪ある人間に与えてくださる救いの賜物になったのです。180度の逆転です。み言葉の説き明かしとしての説教が重んじられるようになりました。なにより自国語^{*}で礼拝がなされるように変えられました。会衆自身が高らかに賛美の歌声をあげるようになりました。そのためルターも多数の讚美歌を作りまし^{*2}た。自分で聖書を読めるようにドイツ語に翻訳されました（ルター訳）。

彼の定義によれば、教会^{*3}というものは「すべての聖徒／信徒の集まり」であって、その中で福音が宣べ伝えられ、聖礼典が執行される場所なのです。しかも、み言葉を語り、執り成しの祈りをする祭司の務めはすべてのキリスト者に与えられているのです（全信徒祭司性／万人祭司^{*4}）。もちろん彼は、そのために召されて訓練を受け、教会からその務めを正規に託された牧師を重んじましたが、根本的な委託は教会にされていること、一人ひとりの信徒に祭司としての本質が与えられていること、したがって、福音のために生きることを勧めました。

「贖宥券^{しよくゆう券}」販売に疑義を呈して『九十五箇条

* それまではすべてラテン語が用いられていた。

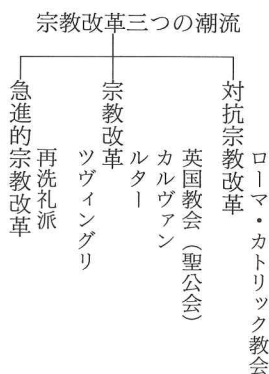
*² 教会讚美歌には有名な「力なる神は」（神はわがやぐら）450はじめ1, 23, 43, 45, 97, 120, 121, 122, 130, 141, 235, 240, 259, 300, 364（作詞）、18, 241, 296（作曲のみ）が取られている。

*³ アウグスブルク信仰告白第7条。

*⁴ LAOS創刊号「信徒として生きる」12-15、34-41頁、第7号「宣教と奉仕の理論と実際」14-19頁を参照。

*⁵ 一般に「免罪符」と呼ばれてきた。

* LAOS第8号「キリスト者として生きる」10-17頁を参照。



の提題』を公表した(1517.10.31.)ことに端を発した改革運動は、当時普及していた印刷術の力もあって瞬く間にヨーロッパ全体に広がり、福音主義陣営の立場を鮮明にするために『アウグスブルク信仰告白』(1530)が公にされました。ルターは家庭で信仰を正しく伝えるために『小教理問答』を著し、また信仰者にとって家庭の大切さを示して、カタリーナと結婚し多くの子をもうけました。聖職だけでなくすべての職業を神の召しと理解する新しい職業観も打ち出しました。一般初等義務教育の必要性も訴え、今日の社会福祉のはしりですが町の人々の相互扶助のために共同基金を用意するよう勧めたり、高利貸しを戒めたりと社会生活全般へのアドバイスもしました。

ヴィッテンベルク大学で聖書を教え続け、最期まで牧者としての働きを全うして、62歳でこれまた旅先のアイスレーベンで逝去し、遺体はヴィッテンベルクの城教会に葬られています。ルターが説いた福音理解はドイツ、北欧、中東欧に広まり、その影響はスイスやイギリスにも及びました。

2) ツヴィングリと再洗礼派へ

スイスの宗教改革者フルドリヒ・ツヴィングリ(1484-1531)はエラスムスのヒューマニズムに影響を受け、チューリッヒ大聖堂教会の説教者となったあとは「聖書のみ」に固く立って宗教と政治、教会と国家、聖書と剣を統合して預言者のような神政政治を実現しようとしたが、カトリックとの軍事対決の中で戦死します。ルター派とスイス教会の連携を求めてのマルブルクで開かれた討論で、恵みのみ、聖書のみのみの教理では合意したのに、聖餐におけるキ

リスト（の体と血）のあり方をめぐって、象徴説に立ち、現在説を主張するルター派とついに一致に至りませんでした。

ツヴィングリの弟子の中で彼のような教会（信仰共同体）と国家（地域共同体）の一致を目指すことにあくまで反対する人々は、とくに幼児洗礼をめぐって完全に対立するに到りました。彼らは自分たちの子どもに洗礼を施すことを拒み、信仰告白に基づく洗礼を互いに施し合うことを始めました（1525年）。当時再洗礼は極刑となる重罪でした。ミュンスターの乱^{*}（34-35）を起こした一派もありましたが、徹底した聖書的平和主義を掲げて新大陸にわたったメノー・シモンズの信奉者たち（メノナイト派）や現代文明や兵役を拒否しユニークな共同生活を今も送るフッター派などこの流れです。宗教改革の原理の徹底を求めたので急進（ラディカル）派宗教改革と呼ばれます。

^{*}ドイツのミュンスター市を拠点に新エルサレムの建設を呼号し、千年王国の到来が近いと説き、共産主義的生活、一夫多妻制を布いたが、一年半で陥落した。

3) カルヴァンとその流れ



ジャン・カルヴァン
(1509-1564)

宗教改革第二世代に属するジャン・カルヴァン（1509-64）はフランスで生まれ、ヒューマニズムと法律を学び、20代半ばで回心し、『キリスト教綱要』を著して福音主義を体系化します。ジュネーブで説教し、この自治都市を理想的なキリスト教都市に作り変えようと努めます。義認論ではルターと大きな相違はなく、予定説^{*2}や神の絶対主権の強調は彼に特徴的です。教会と国家を区別するだけでなく、教会訓練・戒規の権限を教会（＝長老会）は確保します。長老と呼ばれる信徒の代表と牧師による運営は、聖職者位階制による監督制と異なり、いわば代表制民主主義による教会政治（長老主義）のやり方です。

^{*2}人間の意思は救いには無力であり、人間の救いと滅びは神の主権により予め定められているとする説。

フランス（ユグノーと呼称）、オランダ、イングランド、スコットランド（弟子ジョン・ノックスの活躍）さらにアメリカ大陸に広まっています。

4) 英国の宗教改革

英国の教会はローマ・カトリックとの関係では事実上の自決権を持っていましたが、ヘンリー8世の離婚問題を契機にローマから独立します。血なまぐさいこともありました。教義的にはルター派の影響もある広い意味のカルヴァン主義、礼拝形式はカトリックの伝統を汲み、教会政治は監督制という英国教会（日本では聖公会）が生まれ、欽定訳聖書と祈禱書も編み出されます。

* 1611年ジェームズ一世のもとに47名の学者・教職の手によって完成。

同じイギリスから非国教会派（ノンコンフォーミスト）、純粋派（ピューリタン）が登場します。ことは国、国教会との関係です。それらに対する教会の独立、また各個教会の中での徹底した直接制民主主義の主張です。この流れにバプテスト派や組合派も入ります。また、ピューリタン革命と名誉革命のあと画期的な信教の自由を保障する寛容令（1689）が発せられます。今日の民主主義の成立に大きな関係があると言われます。

5) ローマ・カトリック内の改革運動（対抗宗教改革）

* 実はオスマントルコが現在のトルコ、ギリシャ、ハンガリーなどを支配下に収めオーストリアに迫っていた。

ヨーロッパをすべて傘下に治めていたローマ・カトリック教会ですが、プロテスタンティズムが席卷して半分ほどを失います。宗教改革の出現以前にも教会内部の腐敗を憂い、道徳的刷新運動はヒューマニストたち、またいくつもの修道会内部で起こってはいましたが、宗教改革は教義の根本にまで踏み込んだのでした。

宗教改革に対抗するようにローマ・カトリック

★² 人文主義者。エラスムスなどのようにカトリックの信仰を保ちながら、聖書を原典で学び、西洋古典にも通じていた。

クの中からも教皇庁主導の改革と同時に、イグナティウス・ロヨラはイエズス会という修道会を作り、厳格な規律と絶対服従の精神で自らを整え、南ドイツやポーランド、ハンガリーを取り戻しただけではなく、当時の大航海時代、新大陸への進出という風潮と共に、アジア・アフリカ、南北アメリカへキリスト教を布教に出かけます。彼の同志ザビエルがインド・日本・中国へ赴いたのもこの流れの中のことです。ルターが「九十五箇条の提題」を掲げて宗教改革の烽火をあげてから僅か32年後に、その反動で日本宣教が始まったのですから、当時のスピードから考えて恐ろしく早い対応だったと言わなければならないでしょう。

★³ 西洋の文物に関心を持っていた信長は宣教師を歓迎したのに、秀吉が切支丹を弾圧するようになったのは宣教師の働き背後にスペインなどの領土的野心を警戒したからといわれている。事実フィリピンも中南米も植民地化されていった。

もっともこの世界宣教の広まりは、時を同じくするヨーロッパによる植民地支配とのつながりを指摘されることも歴史を学ぶ者が心しなければならないことでしょう。

もう一つのたいせつな出来事はトリエント公会議（1545-63）で、正すべき堕落は正し、神学的に福音主義との対決を明確にしたことです。「信仰と行為」「聖書と聖伝」、七つの秘跡、ミサにおける実体変化といけにえというミサ理解、位階制などが確認されました。

〈話し合いのために〉

- ①ルターは教会の何を改革したのでしょうか。
- ②ルーテル教会が大切にしてきたものにはどんなことがあるか、話し合ってみましょう。

第4章 近現代史と教会の展開 (17-20世紀)

1) 宗教改革の思想の 固定化——プロテス タント正統主義

* 三つの古典信条（使徒信条、ニケア信条、アタナシオス信条）と、アウグスブルク信仰告白、同弁証、シュマルデン条項、大教理問答、小教理問答、和協信条の九つの文書。

ルターやカルヴァンら宗教改革の先達の生き生きとした信仰と神学が、16世紀後半から17世紀後半にかけて固定化し、基本的な教理を集大成する動きが盛んになりました。ルター派内部の神学論争をおさめて「和協信条」を制定し（1577）、使徒信条、ニケア信条などの古典信条とアウグスブルク信仰告白ほか宗教改革の中で生み出された6つの文書をあわせて「一致信条書」(1580)を作りました。改革派も予定説をめぐり論争が起きましたし、ピューリタン革命の中では「ウェストミンスター信仰告白」と大小の「ウェストミンスター教理問答」が制定されカルヴァン主義神学を大成しました。

この流れがさらに中世のスコラ神学のような理性重視の傾向を強めていき、17-18世紀の啓蒙主義の時代には思想的な影響力を失っていき、同時に人々の信仰に熱も潤いも枯渇させていくことになりました。

2) 信仰の炎——敬虔 主義

* フランケはデンマークの東インド植民地のタミール人伝道に尽力した（デンマーク・ハレ・ミッシヨン、1706）。

全体としての教会に信仰の活力が弱まった18世紀のヨーロッパに、制度としての教会よりも個人的な集まりを大切にして、内面深く信仰の火を燃やし、キリストにならった生活を心がける運動がドイツなどで起こりました。シュペーター、フランケ、そしてヘルンフト兄弟団を始めたツィンツェンドルフなどの人々が中心でした。この流れは敬虔主義と呼ばれました。しかも、この中から救いの喜びを世界に広めようと、プロテスタントでも海外伝道が始められたことも忘れられてはならないでしょう。ただ、信仰が私事化する傾きもなかったとはいえませ

ん。

3) 理性の時代——啓蒙主義

宗教改革の嵐が収まったあとの17世紀半ばから18世紀末までは時代の精神が大きく変わりました。天文学のケプラーやガリレオ、古典的物理学の礎を築いたニュートンたちはこの世界に内在する法則を見出し、哲学者のデカルトは人間の本質を知性に求めました。ロックやルソーその他の思想家たちは政治社会にも合理性を追求しました。18世紀後半にフランス革命やアメリカの独立戦争が起こります。これらはみな自然と歴史への人間の責任を自覚させていった結果だとも評価できるわけです。

しかし、そういう中でキリスト教は旧体制と結びつき新しい社会を生み出すことに関心が弱かったり、神学が正統主義の煩瑣な議論に陥ったり、神は創造のあとは世界をその自律的な動きに任せてしまうという考え方（理神論）が強くなったりという状態で、人々の生活によい影響を及ぼすことは少なかったのです。

4) リバイバル——信仰復興あるいは大覚醒運動

そして霊的なエネルギーが大きな爆発をみせたのは、18世紀から19世紀の欧米においてでした。まず300年前に生まれたジョン・ウェスレーと弟のチャールズを挙げなければなりません。1738年の劇的な回心とそれによる新生と救いの確かさを得た経験により、ジョンは福音を、当時既存の教会から見放されていたような英国の貧しい大衆にまた新大陸の移住者たちに分かち合わなければと、実に熱心に伝道して回りました。野外で魂を揺さぶる説教をし、讚美歌を作り、社会の病巣と戦いました。メソヂスト教会はここから生まれました。

他の諸教派もこの影響を受け、また同時に産業革命によっていっそう大きくなっていった社会問題と熱心に関わるようになり、労働者の生活向上のために寄与しました（マルクスの『共産党宣言』1848年）。ブースがロンドンに設立した救世軍（1878年）の下層社会への救済事業、ドイツでは内国伝道（労働者たちの福祉）を進めたヴィヘルン、ディアコニアの働きを起こしたレーエなどが思い出されます。

アメリカでは、まだ植民地だった18世紀前半の第一次、独立後の1790年代の第二次、さらに19世紀半ばの南北戦争のあとの第三次リバイバルが席卷します。信仰の自由を求めて新大陸に渡った人々も多くいたはずでしたし（1620年ピルグリム・ファーザーズ）、宗教色の強い新しい国を造っていったのですが、統計の示すところでは1800年に教会とつながっていた人は人口の7%だったといえます。東海岸から次第に中西部へと開拓していく人々の渴いた魂に向かって、まずは旧大陸から来たJ.エドワーズなどの説教者たちが鋭く悔い改めを説きました。第二次では開拓地でも野外伝道集會が開かれ、数知れない多くの人々が靈的な高揚を味わいました。さらに、国を二分して戦った南北戦争、その最中のリンカーンによる奴隷解放令（1865年）のあと、ビーチャーやムーディーら大衆伝道説教者が回心と新生を訴えました。日本のプロテスタント教会の礼拝の形の原形もフロンティアでの伝道的な集會に求められるでしょう。

ヨーロッパでもそうでしたが、アメリカでも18世紀後半から19世紀にかけて爆発的に展開するようになる海外伝道——主としてアジア・アフリカ——は、この熱いリバイバル運動による

信仰の高まりのおかげだといっても過言ではありません。とくに女性たちの祈りと貢献は大きなものでした。

5) 20世紀——新しい教会のあり方へ

19世紀後半のヨーロッパは自然科学の発展によるキリスト教への挑戦もありましたが、他方産業、文化、軍事、政治などあらゆる分野で先進国となり、また、社会の進歩の延長上に神の国が来るといった楽観的な歴史観が覆うようになっていました。

しかし、20世紀前半に「キリスト教世界」の真っ只中で未曾有の深刻・大規模な悲劇をもたらした世界大戦を二度までも経験することになりました。どちらの大戦でもドイツの教会はむしろ戦争を支持してしまいました。その反省からバルトらは人間中心ではなく「神の言葉」中心の神学を標榜し、またヒトラー政権下には、ボンヘッファーはじめ心あるキリスト者たちが「告白教会」を作り、戦争に反対して「ドイツ教会闘争」を繰り広げました。彼ら命を賭して戦った人々の信仰的生き方と、その神学的立場を鮮明にした「バルメン宣言」(1934)とは、根本的な反省を迫られた戦後の教会に大きな指針を与えました。「他者のための教会」というあり方の提唱もその一つです。

20世紀のキリスト教はまたそれ以前とはいくつもの大きな違いで特徴づけられます。信仰と職制(教理や教会の秩序)、生活と実践(教会の社会的な働き)、世界宣教、さらに日曜学校(キリスト教教育)等の諸分野での教派を超えた話し合いと協力の積み重ねは、第二次大戦後の1948年の世界教会協議会(WCC)の創設に至り、現代世界での福音宣教と奉仕における

「教会一致（エキュメニズム）運動」を担っています。第二ヴァチカン公会議（1962-65年）によって自己刷新を志し広く開かれた教会に転換してきたローマ・カトリック教会と、聖書の共同訳（日本では『新共同訳』1987年）をはじめとして、さまざまな面での協働と奉仕をしてきています。「和解」は教会が世界に発信するメッセージですが、なによりもまず教会自身が聴くべき使信です。

* 19世紀末のYMCA、YWCA、ギデオン協会の設立、また世界学生キリスト者連盟の組織に信徒の貢献が圧倒的に大きい。そこからエキュメニカル運動の指導者たちも輩出していきました。

「信徒の再発見^{*}」とさえ呼ばれるほどにこの世紀は、それまでの教職中心の教会のあり方から、信徒が教会のあらゆる分野でまた社会の只中でキリスト者として責任を持って活躍するようになってきた時期でもありました。それは、教会の働きが伝道（ケリュグマ）、奉仕（ディアコニア）、交わり（コイノニア）という具合に包括的にとらえられるようになり、しかもその福音宣教の真の主体は神ご自身である（神の宣教ミッシオ・デイ）という理解が広まったからでもあります。その働きの中には、伝統的な罪の赦しの宣言を中核とする伝道と、奉仕の理解の広まりでもありますが「正義・平和・被造世界の保全」のためにする貢献があります。

キリスト教というものの中にも、教会のあり方、信仰と神学、霊性、礼拝、社会との関わりをはじめ伝統と実践の実に多くの面で「多様性」があることの理解が広まり、相互承認の必要性が認められるようになってきました。対話と協力です。

その中で世界のルター派の140余りの教会で構成しているのが、ルーテル世界連盟（LWF）^{*2}ですし、そこを通して諸教会が協力しまた一致して世界に向けて奉仕し、ローマ・カ

★² ルター派諸教会の交わり。7年に一度大会を開き、その間の運営の責任は理事会が負い、ジュネーブに事務局がある。神学と研究部門、宣教と開発部門、世界奉仕部門をもち、ルター派内部の協力では宣教の協力を進め、世界でもっとも有力なNGOの一つとして紛争の和解、人道支援、人権擁護や開発と奉仕に努め、また精力的にエキキュメンカル運動を推進している。

トリック教会をはじめ、多くの異なる伝統とも対話してきました。その最たるものが宗教改革以来の争点をめぐって大事な合意に至ったローマ・カトリックとの「義認の教理に関する共同宣言」(1999年)です。

世界全体が次第にまた急速に「多元的な社会」になってきました。宇宙船「地球号」とかグローバル・ビレッジ(地球村)というように、いまや世界はしっかりと結び付けられ、運命共同体になりました。そこには多くの民族、文化、宗教、政治体制、価値観と生活形態があります。それらを結ぶ情報も経済もネットワーク化され、人もモノも国境を越えて自由に行き来しています。また一つの国の中にもそれらが混在するようになってきました。

そのような中で、宗教としてのキリスト教は他宗教を尊敬し対話し、また世界のために協力する相手として認めることを始めました。もちろんそのことは聖書を通して示された神の愛と救いの真理を証しすることを止めることではありません。いっそう誠実にやらなければなりません。医療を含めて科学技術は恐ろしいほどに高度の発展を遂げてきましたし、今後もどこまでも進もうとするでしょう。キリスト教会は人間の福祉と真の幸福を見据えながら、それらとも対話し、批判と協力をしていかなければならないでしょう。なによりも63億人の人々が、真に平和に、心豊かに、人間の尊厳をもって生きていくことができるように、み言葉と行いを通して、奉仕する務めが教会に課せられています。

西暦2000年の節目を越え、いよいよわたしたちはキリスト降誕以来の第3千年紀に入りました

た。使徒言行録は28章で未完です。すでに2千年にわたって書き連ねられてきたその続きを、わたしたちもその存在のすべてを挙げて書き続けていきましょう。終末の完成の日まで。

〈話し合いのために〉

- ①近・現代史の中でキリスト教の宣教の形はどのように変化したかを考えてみましょう。
- ②私たちは異なる宗教や価値観を持った隣人とキリスト者としてどのように対話し、関わることができるでしょうか。

第5章 日本のキリスト教史（16世紀からの456年間）

1) キリスト教の日本との出会い

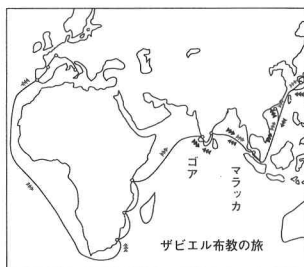
シルクロードを通してキリスト教が中国に伝えられたのは、最初がいったいつだったかなど分かりません（「大秦景教流行中国碑」西安、7世紀唐時代。景教はネストリウス派キリスト教のこと）。公式の宣教師の到来以前にも、信仰を持った商人たちが遠くペルシャなどからやってきて中国で教会堂を建てていましたから、もしかしたら日本からの留学生（空海など）ともなんらかの接点があったかも知れません。しかし、はるばる海を越えて宣教師が日本にやってきてキリスト教を宣べ伝えるのは16世紀半ばまで待たなければなりませんでした。時あたかも戦国時代の真っ最中、信長による天下統一の直前でした。ヨーロッパ人はマルコ・ポーロの『東方見聞録』（1295）で東方に関心を向け始めていました。



フランシスコ・ザビエル
(1506-1552)

宗教改革に刺激を受け、カトリック教会の内部で生まれたイエズス会などが世界宣教へと乗り出します。創立者ロヨラの同志フランシスコ・ザビエルは南インドで布教活動をしします。鹿児島出身のヤジロウ（弥次郎）とマラッカで出会い、日本伝道を志します。彼はインドのゴアに送られ、そこの学院で信仰を学び、洗礼を受けます。日本人最初のキリスト者です。

ザビエルはヤジロウの案内で、トルレスとフェルナンデスという二人の会士を伴い、1549年8月15日鹿児島に上陸します。日本伝道開始の日です。ルターの宗教改革開始以来わずか32年後のことです。



2) ザビエルたちの布教活動

ザビエルの日本滞在はわずか2年3ヶ月と短

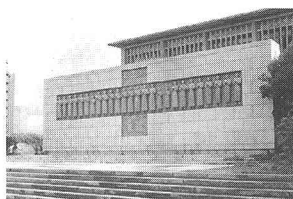
かったのですが、日本伝道の基礎を築きました。鹿児島から平戸、博多、山口を経て京都、さらに山口、大分を訪れ、それまでの日本宗教・思想界にまったくなかった世界の造り主である全能の神を説きました。仏教の概念を媒介にしてキリスト教を伝えようとして大きな苦勞もしました。この間500余の改宗者を得ました。

* 日本古来の天神地祇、八百万の神々を表わす「神」という語を使わず、創造神に似ているものとして仏教の大日如来からとって聖書の神に「ダイニチ」を当ててみたが正しく伝わらなかった。すぐにラテン語をそのまま用いて「デウス」と呼ぶようになった。

秀吉による「伴天連追放令」(1587)までの最初の40年足らずの時期に伝道は大いに進展し、2000万の人口中信者は35万ほどになったと推定されています(2%近い!)。日本人が葬儀を重んじるのを特に配慮したり、信者の組を作って信心業に励むと同時に救貧事業にもあたりました(「慈悲の所作」マタイ25章の兄弟愛の実践)。宣教師たちの働きもめざましく、トルレスは在日21年、3万人に授洗、教会創設50と伝えられ、外科医でもあったアルメイダは伝道しつつ大分に育児院や総合病院を建て西洋医学を普及させました。フロイスは死ぬまでの35年間近畿や九州を奔走、信長や秀吉ともよい関係でした。ヴァリニャーノは日本的なものを取り入れることに積極的でした。「天正遣欧使節」を実現したのも彼でした。彼らの教育、学問、文化の領域での貢献も見逃せません。

*2 4人の少年をローマに派遣した。

けれども1597年長崎での「26聖人の殉教」(6名はフランシスコ会宣教師、日本人20名の内イエズス会士3名、信徒17名。少年も含む)以降、キリシタン禁教と迫害(京都、長崎、江戸でも大殉教)、宣教師追放、島原の乱と鎖国政策、踏絵をはじめとする徹底した弾圧政策で、キリスト教は根絶やしにされたかに見えました。この時代を描いた遠藤周作の小説『沈黙』はあまりにも有名です。しかし、一部はひ



26聖人殉教記念碑(長崎)

そかに「隠れキリシタン」として信仰を保って生き延びていたことが200年後に分かります。

3) 福音宣教の再開 ——プロテスタント も参入

19世紀に入り欧米諸国は東アジアへの接近を試み、江戸時代末期、黒船の来航により日本は強引に世界との交際に引き入れられていきます。日米修好通商条約（1858年）で日本在留米国人の信仰行為の自由・礼拝所建立とその保護が認められ、ここにキリスト教伝道の手掛かりを得、アメリカから聖公会のウィリアムス、改革派のフルベッキ、ブラウン、長老派のヘボンなどが宣教師として公然と日本に上陸したのです（1859年）。横浜の居留地内に日本人青年たちが通い、明治6年のキリスト教解禁以前の1872年（明治5）7名が洗礼を受け横浜公会（今日の日本基督教会横浜海岸教会）が誕生します。その後植村正久など明治期のキリスト教の指導者となる人々を輩出、横浜バンドと呼ばれています。

長崎に赴いたカトリック司祭プチジャンのもとに浦上の信徒たちが200年の潜伏を経て名乗り出たので世界は驚愕しました（1865年）。幕府は彼らを諸藩に預けて厳しく改宗を迫り、中でも島根県津和野での多くの殉教者を出しながら信仰を貫いた乙女峠の出来事は、450年を越す日本キリスト教史の中で忘れてはならない信徒たちの命懸けの証しです。

諸外国の圧力の下に明治政府は1873年（明治6）切支丹禁制高札の撤去をします。熊本洋学校では退役将校ジェーンズの薫陶を受けて生徒らが「奉教趣意書」を宣言（熊本バンド、1876）、海老名弾正他多数は新島襄の同志社で学び、新しい国家建設を志します。札幌農学校

ではクラーク博士の魂に触れた内村鑑三、新渡戸稲造たちは「イエスを信ずる者の契約」に署名（札幌バンド、1877）。このように宣教再開の初期には教会派遣の牧師・宣教師たちの貢献と、教育などの専門職に招かれた信徒の影響と、二つの流れがあったのです。

4) 近代化とナショナリズムの中で

* 明治政府の企画による神道、仏教、キリスト教の協議会。世相の悪化を防ぎ国民精神の作興のために宗教的感化の必要を感じた政府が1912（明治45）年に開催した。この会はキリスト教が初めて正式に神道、仏教と対等視されたという点で有意義だったとされています。

*² 谷中村鉈毒事件

明治以来のキリスト教は、当初の欧化政策で歓迎されているようでもホンネは「和魂洋才」、やがて帝国憲法（1889年、明治22）、教育勅語煥発（1890）、教育と宗教の衝突事件（1891）というナショナリズムのあおりを受けます。三教会同（1912）、大正デモクラシーと国際協調主義という好意的な時期を経ますが、再び十五年戦争の渦に巻き込まれ、太平洋戦争のもとでは敵性宗教と見られるという具合に、ほぼ20年周期で環境は変化しました。

その中で都市部の中産階級を中心に全国に伝道の働きを展開し、教会を形成してきました。女子教育では開拓的役割を果たし、ミッションスクールを全国に建て教育に力を入れました。信者数の小ささ（1%の壁をなかなか越えられない）にもかかわらず文化の諸領域ではキリスト教的なものの影響は少なくなかったと言えるでしょう。福祉・人権の分野での先進的な貢献もあり、田中正造の反公害運動や内村の非戦論などもありましたが、大勢に抗しきれず、あの戦争の悲劇と悪を押しとどめる力にはなりえませんでした。

1941（昭和16）年には宗教団体法によってプロテスタント諸派は新たに日本基督教団のもとに合同を余儀なくされ、国策遂行に協力していくことになりました。

5) 戦後の展開と課題

敗戦と共にアメリカ主導の民主化は日本に「キリスト教ブーム」を起こしましたし、中華人民共和国の成立にあたって多くの宣教師が日本へ移りましたが、「ブーム」は長続きしませんでした。1967年には日本基督教団の鈴木正久総会議長が「第二次世界大戦下における日本基督教団の戦争責任の告白」を発表し、時代と社会に対するキリスト教会の責任を自覚しようとなりました。これはそれに続く長期間にわたる教界内での、もっぱら教会の社会的責任と参与とを強調する「社会派」とひたすら魂の救済を訴え伝道に専念しようとする「福音派」の対立を加速させました。平和運動や天皇制との関わり、いのちの尊厳の擁護、アジアとの連帯やグローバルな奉仕、国内での「小さくされた人々」、さまざまな意味での少数派の人々と共に生きることが絶えず志向されてきました。伝道でも奉仕でも教会自身が依然として人口の1%に過ぎないからこそ、エキュメニカルな協力が必要です。

キリスト教会は、聖書が証しするイエス・キリストの福音を21世紀の日本という脈絡の中で、この時代を生きる人々にとってもっとも意味のあるものとして語るができるように努め、ひとりでも多くの人に生きる喜びを分かち合い、また神さまがなさっておられるミッションに参加していくことが期待されています。

〈話し合いのために〉

- ①ザビエルの時代から現代まで、日本におけるキリスト教宣教方法の特徴について話し合ってみましょう。
- ②戦前・戦後を通して、日本における教会の宣教には多くの困難があります。宣教を妨げるものは何でしょうか。また、私達に求められている働きはどんなものでしょうか。

第6章 JELCの113年の歴史

1) アメリカからの宣教師



シェーラー



ピーリー



山内夫妻



ブラウン

ルーテル教会の日本宣教は、アメリカの南部一致ルーテル教会が派遣した二人、J.A.B.シェーラーとR.B.ピーリーが1892（明治25）年の2月と11月に来日したことに端を発します。幕末にやってきた教派と比べると30年あまり遅れるなか、南北戦争の痛手から立ち直ったアメリカのルーテル教会も世界宣教に乗り出します。呼び掛けに応えたのは、一人は正規の神学教育は受けておらず、もう一人は神学校を卒業したばかりの青年でした。海外伝道局の方針は、まだ伝道が行われていない土地を伝道地を選ぶことと、働きは伝道一本でということでした。佐賀中学校の英語教師の職を得て、翌1893年春二人は日本語教師だった山内量平と幹枝夫妻を伝道師として伴って九州の佐賀に行き、4月2日のイースター礼拝をもって日本での福音宣教を始めます。しかし反発は強く嫌がらせを受けます。3月26日にピーリーによって最初の洗礼が志水徳松に授けられたことが記録されています。

第二陣の宣教師は、のちに九州学院を建てたC.L.ブラウン、神戸に骨を埋めるまで終生日本伝道に従事したJ.M.T.ウィンテル、それにC.K.リップードです。さらにスタイワルト、ミラーが加わります。佐賀では牧師となった山内量平、熊本（1905）に山内直丸（1899年に二人は邦人として最初の按手）、久留米では最初期の受洗者の一人で牧師となった米村常吉が宣教師と協力して伝道します。博多伝道の開始は1905年です。

太平洋戦争で中断されるまでの最初の50年間

にアメリカのルーテル教会は教職24人、婦人宣教師18人（牧師宣教師夫人を含まず）を送り出し、彼らの働きを支えると同時に、日本の教会を全面的に応援してくれたのです。宣教開始以来最初の四半世紀に、九州から出発し、全国に14教会を生み出します（それにフィンランド系の6つがあります）。

2) フィンランドからの宣教師

ユーラシア大陸の西北の果て、フィンランドは19世紀末には政治的にはロシアの属国でしたが、東の果て、日本に福音的信仰を伝えたいとの運動が高まりました。小学校長で信徒伝道者のA.ピトカネンの「日本へ、さあ、日本へ（ヤパニーン、オイ、ヤパニーン）」という讚美歌（『宣教百年記念讚美歌集』21番）にその思いがよく表わされています。フィンランドルーテル福音協会（SLEY、英語標記ではLEAF）が1900（明治33）年、日本へ先ず派遣したのはヴェルローズ牧師一家と、まだ17歳だったE.クルヴィネン嬢でした。本人の病気と小さな息子の死で牧師は帰国しますが、残った彼女は最初佐賀での伝道に協力したあと、送られてきたもう一人の婦人信徒宣教師ウーシタロと一緒に上京、さらに信州に伝道を展開します（下諏訪1905）。ミンキネン、溝口弾一が加わります。千駄ヶ谷（のちの東京池袋教会）が始まったのは1907（明治40）年、札幌教会ができるのは1916（大正5）年です。

機関紙「救いの証」を発刊、飯田に神学塾を開設（1913）、幼児教育にも力を入れるなど独自の宣教活動を展開してきましたが、宗教団体に迫られ1940（昭和15）年に福音ルーテル教会（フィンランド系）と日本福音ルーテル教会

*「日本へ、さあ、日本へ」訳詞したのはフィンランドにはじめて留学した渡辺忠雄牧師の息子・渡辺忠恕。



ヴェルローズ一家(中央)と、クルヴィネン(右端)

は合同します。

3) 戦前の展開と教団 合同

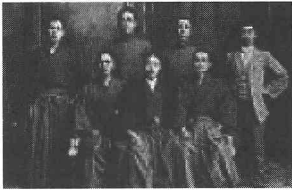
佐賀で始まったルーテルの宣教活動の第2・四半世紀(1918-1943)には教会形成と教育・福祉の分野での働きが大きく繰り広げられます。すでにキリスト教幼稚園として全国で10番目、九州で2番目の佐賀幼稚園が開設され(1902、明治35)、熊本には熊本高等予備校のあと1911(明治44)年に九州学院、1920年に後に総合的な社会福祉施設に成長する慈愛園が始められます。関東大震災をきっかけに老人ホーム(東京老人ホーム)と母子寮(ベタニアホーム)も始められます(1923、大正12)。女子教育のための九州女学院^{*}の開校は1926(大正15)年。優れたヴィジョンをもつ教職・信徒の宣教師と邦人の教職・信徒のパートナーが力をあわせて実現していきました。

* 現在の九州ルーテル学院。大学と幼中高各校。

伝道一本でという当初の方針は修正され、日本の実情に応じた教育や福祉の奉仕のわがが伝道とともになされるようになり、今日の表現を使えば「包括的な福音宣教」を展開していったといえます。

アメリカでは女性たちが世界宣教を特に熱心に担い、教会としての支援と同時に、宣教師夫人や婦人宣教師の働きを祈りと共に経済的に支えたことは特筆すべきです。1911年に太平洋の彼方の熊本に九州学院(神学部を含め)を建てるために総額5万4千ドルの献金を集めました。それはサウスカロライナ州コロンビアの南部ルーテル神学校の建築費用に匹敵します。世界宣教がそれほど大きな位置を占めていたので。

一度佐賀でも始められたのですが、本格的に



最初の神学生たち

日本人の牧師養成を組織立って始めたのは、1909（明治42）年のこと。熊本の宣教師館の一隅で路帖（ルーテル）神学校が開設され、2年後に九州学院神学部となり、1925（大正14）年に東京に移転、日本ルーテル神学専門学校となります。1942年までの50年間にフィンランド系を含め66人の邦人牧師が誕生しています。

百年史の年表は、伝道開始15年目の1908（明治41）年に「青年運動の高まり（久留米、大牟田など）、青年連盟発足（大牟田）」、1925（大正14）年に「第1回信徒大会（11月、京都と久留米で）」、1928（昭和3）年には「婦人大会と婦人会連盟組織」、1931（昭和6）年には「第1回青年大会、青年連盟の組織」を記しています。その背景のひとつは「聖書夏季学校」（第1回は1926年）です。九州には今日に続く壮年連盟があります。教会が生き生きしている時には信徒運動が活発です。最初に自給したのは久留米教会です（1929）。

伝道の早い段階から『小教理問答』（1895）、『アウグスブルク信仰告白書』（1899）を翻訳刊行するなどルーテル教会の信仰と神学の根幹を一貫して重視してきたことも特徴です。

日本が明治以来アジアに進出し、満州事変1931（昭和6）年からの十五年戦争に入っていく中で、キリスト教会は有効な批判・抵抗をすることはできず、ルーテル教会もまた逆に軍国主義に絡めとられていきました。プロテスタント諸派は合同して日本基督教団となり、国策遂行に加担してしまうことになりました。神のみを神とする信仰を全うし平和を造り出す者としての務めを果たすことができなかつたことを真剣に悔い改めたうえで、預言者的信仰に生き、

★ 今日まで続いている日本福音ルーテル教会婦人会連盟のこと。

また和解を求める道を進むことを「宣教百年信仰宣言」で誓いました。

4) 戦後の再出発

教団合同の時点では46あった教会も、戦争で激滅しました。しかし、1946年には再建に着手。ミラー（九州学院）、エカード（九州女学院）、スタイワルト（東京）各宣教師はアメリカから日本へ戻ってきました。結局1947年に教団離脱、1950年に日本ルーテル神学校も再開。福音ルーテル教会（SLEY系）も再建、ELC（東京・東海地方→東海福音ルーテル教会）、オーガスタナ・シノッド（山陽地方）、スオミ・シノッド（東京・甲府）も加わり、1963年にルーテル諸派は合同し今日の日本福音ルーテル教会が組織されました。ミズーリシノッドによる日本ルーテル教団、ノルウェーを背景とする近畿福音、西日本福音ルーテル教会とは協力関係にあります。いっそうの連携が期待されるでしょう。60年代後半からのディアコニア運動^{★4}にはドイツ、デンマークからの貢献が大きかったです。

★1 アメリカにあったノルウェー系ルーテル教会

★2 アメリカにあったスウェーデン系ルーテル教会。

★3 アメリカにあったフィンランド系ルーテル教会。

★4 ヘンシェルは主に東京で障害児との関わりで働き、ストロームは大阪・釜ヶ崎で喜望の家を始め、マルムグレンは、るうてるホームで貢献。

「教会学校教案」「福音新聞」の発行、民放の草分け「ルーテルアワー」のラジオ伝道開始（1951）、東海聖書学院と4つの学生センターの開設はじめ精力的な伝道活動が展開されていき、第3・四半世紀は短時日に大躍進を遂げました。幾多の好条件も重なり、終戦直後教会数は30だったのが1968年には142（1971年に143）、日本人教職は26人が124人（1990年に140人）に、宣教師も90人（66年に96人）、信徒総数16,097人、現住陪餐会員6,592人、年間受洗者619人（54年に710人）。21世紀初頭の現在と比べて、専従伝道者の数（またそれを支える力）

がはるかに多かったわけですが、視点を変えると、数字からはかつては10人のアクティブな信徒が1人の受洗者を生み出していたのが、今日は40人で1人くらいになったとも読めます。

5) 「アスマラ発言」 と自立への歩み

日本伝道に関する海外教会との会議（1969年、当時のエチオピアのアスマラで開催）で時の総会議長が決意を述べ、それをきっかけに日本福音ルーテル教会は総力を挙げて経済の自給（経常費）と宣教の自立に取り組みました。自力では維持できない学生センターを閉鎖したり教案誌を廃止したりしてスリム化を図り、一方では献財を訴え、また収益事業を起こしました。1972年以降4次にわたって総合自立・宣教計画を立てて、内部固めと外への働きを有機的に行おうとしました。「神の民」育成計画（1976）、「教会讃美歌」の編纂（1976）、「一致信条書」の刊行（1982）、式文の改訂（1983）、小児陪餐の導入（1986）、アウグスブルク信仰告白450年（1980）やルター生誕500年（1983）記念の学習運動を通してルーテル教会としてのアイデンティティーを強め、同時に補助教会への教区内支援体制、北海道伝道の推進、名東・藤が丘・三鷹教会など新しい形での伝道、教区の主体性と二、三種教会の強化など積極的な展開が試みられました。教師会も新組織で再出発しました。

* 第一次総合自立計画は1972年、「神の民」育成計画は1976年、第二次総合計画は1980年、第三次は1988年、第四次が1998年に採択・実施された。2002年に21世紀宣教方策（パワーミッション21、愛称：PM21）が10年計画として採択され動き出した。

だいしゅうさい
大嘗祭や部落差別など教会の社会的な意識が問われる中で、第4の収益事業として提案された広島プロジェクトについては臨時総会まで開かれました（1993）。

6) 宣教百年、そして PM21

ルーテル教会の宣教百年記念事業は、1993年

8月に熊本で3000人規模で開かれた記念大会を頂点とする4年間の運動とそこから生まれたものの総体です。礼拝を通して、ルター派の伝統とルーテル教会のルーツを確認し、信仰の先達に感謝し、138の教会が一つであることを実感しました。伝道・教育・福祉またそれに連なる諸々の働きが一つの宣教共同体であること、国内外の教会と連帯し、とくにアジアの人々に奉仕していくこと、時代と社会の課題と挑戦に個々の教会や運動体を通して取り組んでいくこと、なにより次世代へと信仰を継承していくことを誓い、福音宣教は教職だけの仕事ではなくすべての信徒に託されている喜ばしい務めであることを再認識しました。教会はそのすべてが福音宣教のために存在していることを改めて学びました。感謝と歴史認識・悔い改め、希望と決意を表明した「宣教百年信仰宣言」は大会で発表され、翌年の総会で公式に採択されました。

宣教百年記念会堂は1996年に東京教会礼拝堂の再建と一つになって行なわれ、全体教会のためによく利用されています。婦人会連盟の事務局がはいつたことも象徴的です。

大会から9年後、2002年の総会は「パワーミッション21 (PM21)」と呼ばれる21世紀の教会のあり方と働きを求める、10ヵ年の宣教方策を採択しました。**次世代への伝道と信仰継承、証しし奉仕する信徒の育成、教職の研鑽、伝道・教育・福祉などの宣教共同体、世界宣教、宣教のための教会全体の構造改革と財政改革の7プロジェクト**です。百年大会が志向したものの継承・発展という部分と、これまでの一教会一牧師を前提にした各個教会の存続が厳しい状

況下で、むしろ限られた資源をよりよく宣教のために生かすための再編成（新教会・教会共同体へ）という部分から成っています。文字通り21世紀の教会のあり方を志向しています。

戦前50年間の基礎作り、戦後最初の四半世紀での急成長、その後の四半世紀の自立達成のための努力を踏まえて、今日本福音ルーテル教会は、課せられた福音宣教の務めを引き続き果たしていくことができるために、宣教の最前線である各個教会と、ひとつの教会としての全体教会、その間で宣教活動の推進役を担う教区がもっともよい仕組みを見つけようとしています。さらに、ルター派の信仰と神学の伝統に立ちつつ、新しい教会論、宣教論を展開し、2万4千人余の信徒が生き生きとした信仰生活を送る教会へと再生していくその歩みを教会総体で進んでいくその真っ只中にわたしたちはいるのです。

★ 組織のサバイバル（生き残り）から信仰と宣教のリバイバル（再生）へ。

〈話し合いのために〉

- ①あなたの教会のルーツはどのようなものですか。調べてみましょう。
- ②教会の歴史を貫いている神様の救済の働きに、私たちはどのように関わることができるでしょうか。

鈴木浩

1945年生、日本ルーテル神学大学・神学校卒。ルーサー神学校（米国・ミネソタ州）博士課程修了、神学博士。日本福音ルーテル大岡山、諏訪、名古屋教会牧師を歴任。現在ルーテル学院大学・神学校教授、キリスト教学科長、ルター研究所所長。『ガリラヤへ行け』（2005）。

江藤直純

1948年生、一橋大学、日本ルーテル神学大学・神学校卒。立教大学大学院修士課程、シカゴルーテル神学校博士課程修了、神学博士。日本福音ルーテル大江・三鷹教会牧師を歴任。現在日本ルーテル神学校長、ルーテル学院大学教授。

LAOS 講座 第5号 神の民の歩み

—2000年のキリスト教会史—

- 発行日 2006年5月1日
編集者 PM21 第2プロジェクト「証し・奉仕する信徒」委員会
委員長 齋藤未理子
著者 鈴木浩 江藤直純
発行者 「日本福音ルーテル教会宣教方策21」（PM21）推進委員会
宣教室長 推進委員長 徳弘浩隆
発行所 日本福音ルーテル教会 宣教室
印刷所 精文堂印刷株式会社
-



